

介護保険対象者における特殊寝台の利用実態

Electric bed use among nursing-care insurance recipients

藤井 智¹⁾・山崎 哲司²⁾・鈴木 基恵³⁾

Fujii Satoshi, Yamasaki Tetushi, Suzuki Motoe

1. はじめに

特殊寝台は、寝返り起き上がり等の起居動作を支援するもので、介護保険により急速に利用が進んだ福祉用具である。しかし、起居動作以外の生活動作への活用についての調査は少ない。

今回、在宅での特殊寝台上的生活活動についての利用実態調査を行い、特殊寝台活用の留意点を考察したので報告する。

2. 対象および方法

当センターの在宅サービス対象者のうち、介護保険により特殊寝台を利用し、調査に同意した93例を対象とした。調査期間は2006年9月～11月である。

対象者の内訳は、男性52例、女性41例で、平均年齢は、71.9歳±11.4歳であった。疾患の内訳では、脳疾患・脳外傷が44例と多く、他に、骨関節疾患16例、神経筋疾患14例、脊髄損傷・脊髄疾患4例、代謝疾患4例、認知症3例、廃用症候群2例、循環器疾患2例、その他4例であった。介護度の内訳では、要支援1が1例、要支援2が8例、要介護1が7例、要介護2が9例、要介護3が23例、要介護4が28例、要介護5が17例であった。

調査の方法は、自宅に訪問し本人や介護者にヒヤリングを行った。ヒヤリングにおける調査項目は、特殊寝台を用いての生活活動内容（食事、排泄、更衣、整容、清拭、テレビ・ラジオの視聴、読書、趣

味、電話、団らん、昼寝など）とそれに要する時間、住環境（特殊寝台が設置された部屋の広さ、特殊寝台設置階のリビングの有無と部屋数）、特殊寝台に配置された身の回り品目のレイアウト等とした。

3. 結 果

3.1 就寝時を除く特殊寝台上時間と、要介護状況との関係

夜間の就寝のみに特殊寝台を利用する人は3例のみで、夜間の就寝以外にも特殊寝台を利用している人は90例（97%）と対象者のほとんどであった。

高齢者の生活において、特殊寝台の利用は、夜間の就寝以外にも昼寝程度には一般的に利用される場合があると考えた。そこで、利用者の昼寝時間の平均が123.5分であったことから、2時間を区切りとして、活動内容を考えた。

夜間の就寝以外にも特殊寝台を利用している90例のうち、就寝時以外の利用時間が2時間未満の人は20例（21.5%）で、対象者の約4分の3である70例が、就寝以外にも2時間以上特殊寝台を利用していた。

さらに、要介護状況別に、特殊寝台の利用時間をみたものを図1に示す。

要支援の1例は、就寝のみの利用であった。しかし、介護度が軽い群でも、就寝時以外に2時間以上過ごす人の割合は、要支援2では8例のうち5例（62.5%）、要介護1では7例のうち5例（71.4%）と半数以上を占めていた。

また、要介護3や要介護4のように、介護度が重い群でも、特殊寝台上で過ごす時間が2時間未満と、離床生活を心掛けている人の占める割合は、それぞ

1) 横浜市総合リハビリテーションセンター
機能訓練課 理学・作業療法係
2) 横浜市総合リハビリテーションセンター
地域サービス課 在宅支援係
3) 横浜市総合リハビリテーションセンター
企画研究課

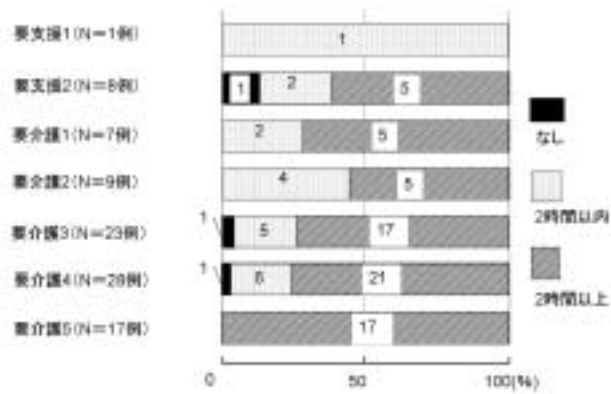


図1 就寝時を除く特殊寝台上時間 (N = 93例)

れの介護度の26.1%、25.0%と4分の1程度はみられた。さらに、就寝以外は離床している場合も2例あり、必ずしも介護度が重いほど就寝時間が長いとは言い切れない現状がうかがわれた。

3.2 主な生活活動内容

就寝以外に特殊寝台を利用していった90例について、その生活活動の主な内容をみた。主な生活活動内容は、食事が22件、排泄が31件、更衣が64件、整容20件、清拭19件、テレビ・ラジオの視聴が66件、読書が16件、手芸などの趣味活動が11件、電話の利用が11件、団らんの場が19件、昼寝が55件であった。半数以上を占める活動は、多い順にテレビ・ラジオの視聴が73.3%、更衣が71.1%、昼寝が61.1%であった。

3.3 介護度からみた生活活動内容(就寝時を除く)と活動時間との関係

特殊寝台上の活動が2時間以上と2時間未満の場合に分け、「要支援1～要介護1」の介護度の軽い群と、「要介護2～要介護5」の重い群で、各々その傾向を比較した(図2、3)。

特殊寝台上の活動が2時間以上の場合、要介護2以上では、要介護1以下に比較し、「排泄」行為がみられ、「食事」、「整容」、「清拭」、「団らん」などの割合も高かった。「更衣」や「テレビ・ラジオ」の視聴、「読書」は、半数程度において、起床時や就寝前の活動として実施されていた。

特殊寝台上の活動が2時間未満の場合、要介護2以上では、「排泄」、「清拭」、「読書」、「団らん」の行為が行われていた。「更衣」や「テレビ・ラジオ」の視聴は、起床時や就寝前にほぼ実施されていた。

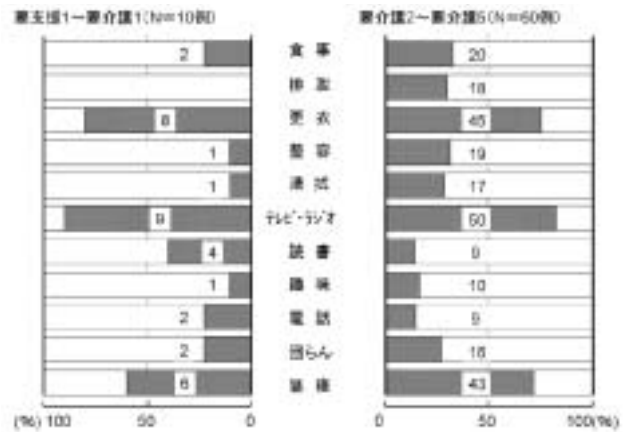


図2 介護度からみた生活活動内容の状況 (特殊寝台上に2時間以上)

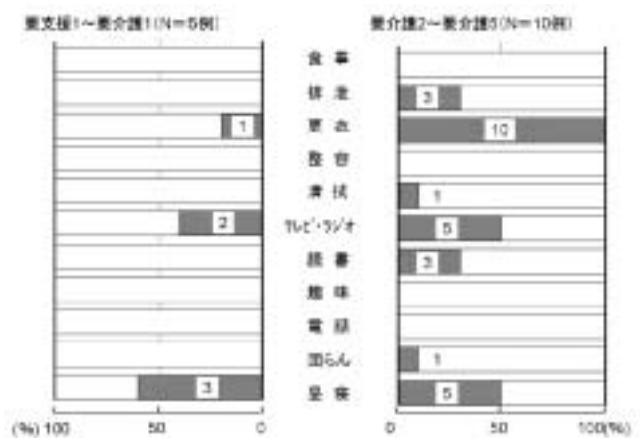


図3 介護度からみた生活活動内容の状況 (特殊寝台上に2時間未満)

3.4 住環境と活動時間

特殊寝台が置かれた部屋の広さは、多くは5～6畳程度であった。平均的広さとしては7畳程度であった(図4)。

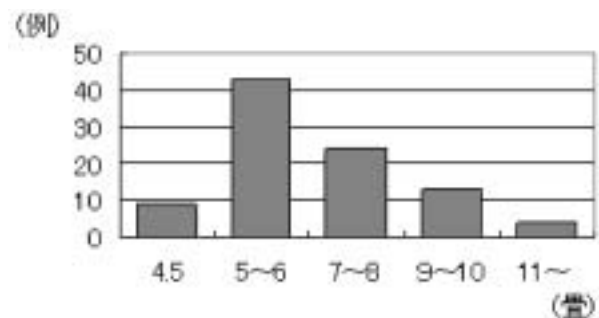


図4 特殊寝台が置かれた部屋の広さ

居住階におけるリビングの有無と平均活動時間を見てみると、居住階にリビングルームがあると、特殊寝台上の平均活動時間が短くなる傾向があった。また、リビングルームの有無と介護度には大きな違いは見られなかった（表1）。

表1 居住階におけるリビングの有無と平均活動時間

リビング	平均時間 (分)	要介護度(例)							合計
		要支援		要介護					
		1	2	1	2	3	4	5	
あり	228.9	1	5	3	3	5	4	10	55
なし	395.0	0	2	3	4	10	9	7	35

3.5 特殊寝台に日常的に配置された身のまわり品

特殊寝台に置かれる主な身の回り品は、ティッシュが一番多く、次いで、テレビのリモコン、めがね、時計であった。その配置位置は、寝台脇のテーブルに置かれる場合が多かったが、他に寝台上やサイドレールにも置かれる場合もあった（図5）。

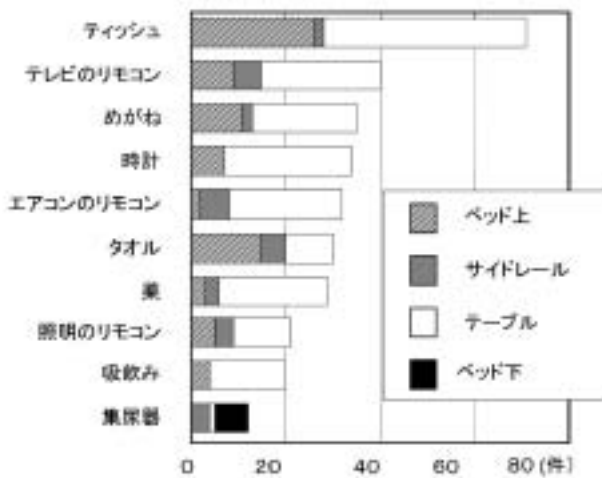


図5 主な身の回り品とその配置

身の回り品を取る姿勢が、臥位姿勢の場合も、座位姿勢の場合も、各々配置は異なっていた。また、介助者のみを使うものは、寝台脇のテーブル上に置かれる傾向にあった（図6）。

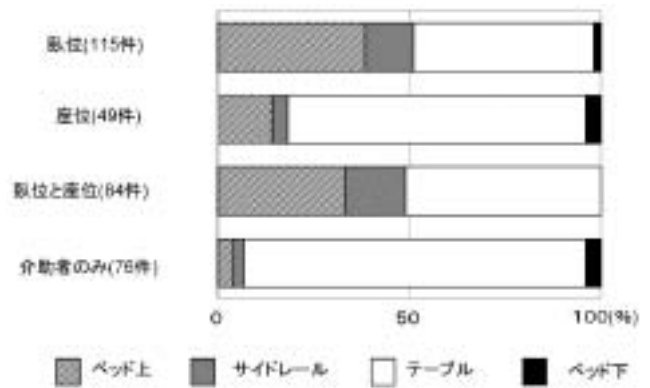


図6 身の回り品を取る姿勢と配置位置

4. 考察およびまとめ

当センターでの在宅リハサービスにおいて、介護保険により特殊寝台を利用していた93例を対象に、特殊寝台上での生活活動について実態調査を行った。

対象者の97%が、特殊寝台を、夜間の就寝のみならず、テレビ・ラジオの視聴や更衣などの生活活動の場として利用していた。そのため、特殊寝台の導入については、単に起居動作の指導にとどまらず、特殊寝台上で実施される生活動作にも着目し、更衣ならば、どのような姿勢で着替えるか、そのときどこを掴むか、寝台の高さはどの程度が適切かなどを踏まえた動作指導が重要だと思われた。

居住階にリビングルームのような団らんのスペースがないと、特殊寝台上で過ごす時間が長くなる傾向があった。特殊寝台上での活動はあまり期待できないため、離床を促す視点から、家の中での活動範囲の拡大が期待できない場合は、外出活動も積極的に取り入れたケアプランを合わせて作成しておくことが大切だと考えた。

特殊寝台には、ティッシュペーパーやリモコンなどの身の回り品が配置されていた実態が見られた。したがって、これらの身の回り品が、起居動作や他の生活動作の妨げにならないよう、座位で使うのか、臥位で使うのかなどを考慮しながら、指導していくことが大切だと考えた。

〔第43回日本理学療法学会〕

（2008年5月15日～17日、北九州市）にて発表〕